

ペルーで思った言語教育

CEGLOC センター長 小野正樹

2023年11月に南米ペルーの首都リマに出張しました。2023年は、日本とペルー外交関係樹立150周年ということもあり、関係者には大変お世話になり、ペルー日系人協会、国際交流基金、筑波大学の共催で、日本語教育シンポジウム & 日本語教師研修会「日本語教師としての成長とエンパワーメント これからの日本語教育を創るために」を実施しました。

国際交流基金と筑波大学は、2023年にリマにオフィスを開設したことから、今後南米各国との関係強化を図ることを共通の目標として、協力体制を組みました。ペルー日系人協会は「令和5（2023）年度国際交流基金賞」を受賞されています。（<https://www.jpjf.go.jp/j/about/award/archive/2023/>）

本イベントには、アルゼンチン、ウルグアイ、エクアドル、コロンビア、チリ、ベネズエラ、ボリビア、そして、ペルーの南米8カ国から次世代を担うことが期待される若手の日本語教師が集い、理想的な日本語学校とは何かを4日間議論して、発表してもらいました。

このイベントを開催して点は2点です。一つ目は、各教員が点として活動していても、なかなか接点がなく、こうした情報・意見交換の場が重要であること。コロナ禍もあり、国際も交流も制限された時間乗り越え、国際関係のあり方をもう一度見直し、その上で効率的な外国語教育を考える必要性があります。もう一点は、南米日本語教育の一つの特長である継承語とは何かを考える大いなるヒントを得たことです。現在、世界で人々のモビリティが活発化し、その結果南米地域に限らず、継承語教育の重要性は増しています。大学レベルでも留学がコロナ禍以前にも増して、これから活発になっていくでしょう。短期留学から、学位取得、そして、その国での高度人材としての活躍など、大学の外国語教育が果たす役割もますます重要となっていくのではないのでしょうか。

世界の課題解決に貢献する言語教育をこれからも筑波大学グローバルコミュニケーション教育センターは模索してまいります。変わらないご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

*本エッセイは、CEGLOC 外国語教育部門の『外国語教育論集（第46号、2024）』に掲載されている巻頭エッセイと同一の内容である。